

## 与那国方言の音韻変化と形態変化

著者	中澤 光平
雑誌名	国立国語研究所論集
号	22
ページ	89-111
発行年	2022-01
URL	<a href="http://doi.org/10.15084/00003515">http://doi.org/10.15084/00003515</a>

## 与那国方言の音韻変化と形態変化

中澤光平

東京大学／国立国語研究所 共同研究員

### 要旨

本論文では日琉諸語（日本語諸方言および琉球語諸方言）の最西端で話されている与那国方言（ドゥナンムヌイ）の音韻変化と形態変化について整理し、特に先行研究で議論が少ない諸点について筆者の考えを提示し、今後の研究のための材料を提供することを目的とする。音韻変化について、与那国方言では次の変化が生じたと考える：狭母音の前での \*/s/ の重子音化（とそれに伴う破擦化）、母音間の \*/k/ の有声化、\*/i/ の後での子音の順行口蓋化、および \*/ni/ の鼻母音化。形態変化について、与那国方言では次の変化が生じたと考える：シアリ形に由来する接続形の \*-i+ari > \*-je, 非意志的自動詞の完了形での \*-ai-uN > -aN, i 語幹動詞の ir 語幹化への類推による \*-is- > -ir-, および形容詞語幹における接辞 \*-sa > [-ha] > -a。<sup>\*</sup>

キーワード：与那国方言、音韻変化、形態変化、内的再建、活用

### 1. はじめに

本論文では日琉諸語（日本語諸方言および琉球語諸方言）の最西端で話されている与那国方言（ドゥナンムヌイ）の音韻変化と形態変化について整理し、特に先行研究で議論が少ない諸点について筆者の考えを提示し、今後の研究のための材料を提供することを目的とする。

なお、本論文では変化を「通時的に言語形式が変わること」に限定するため、活用を語形変化とは呼ばない。共時的に言語形式が変わることは交替とする。音韻変化は品詞に関わらず広く生じる言語変化で、形態変化は特定の品詞や形態素、少数の語に生じる変化を指す。

#### 1.1 本論文で用いる記号

[ ]：音声表記。音韻的な表記を含み得る。〔例〕 [m̥mu] 「雲」

[ / ]：推定音声表記。通時的变化を説明する場合に用いる。〔例〕 [kikjaṃme-]

//：音韻表記。自明な場合は省略する。〔例〕 /sakuci/ 「長男」

<, >：変化。〔例〕 \*pana > hana 「花」

←, →, ↔：交替。〔例〕 kuma 「ここ」 ↔ kumi 「ここに, ここで」

~：音声や語形のゆれ。〔例〕 djadi ~ daidi 「おおごと」

::：対応。〔例〕 sirami :: caN 「虱」

<sup>\*</sup> 本稿は2020年4月にNINJALサロンにて「与那国方言の音韻変化と形態変化」と題して発表した内容を元に加筆・修正したものです。また、本稿は国立国語研究所の共同研究プロジェクト「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」（プロジェクトリーダー：木部暢子）および科研費19H05353の成果の一部です。

- : 接辞境界。〔例〕 ki-Nna 「するな」
- = : 接語境界。〔例〕 asa=du aru 「浅くゾある」
- + : 語境界。〔例〕 asa+aN 「浅い」
- \* : 再建形（音韻表記）の前に付ける。
- × : 正しくない予測形の前に付ける。
- † : 確認できない形式の前に付ける。かつては存在したが現在は見られない形式を含む。
- 【】 : 筆者による補足。

## 2. 与那国島および与那国方言について

### 2.1 与那国島

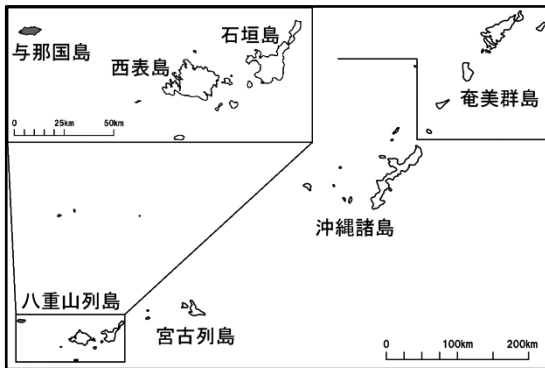


図1 与那国島の地理的位置<sup>3</sup>

与那国島は沖縄県八重山郡に属し、八重山列島を構成する。沖縄本島からは南西へ約 509 km の距離があり、八重山列島の中心的な島である石垣島からも約 127 km 隔たっている。日本最西端に位置し、台湾とも約 111 km の距離にあり、西端の西崎（イリサティ）からは台湾が見えることもある。与那国町は与那国島の一島<sup>1</sup>からなり、祖納、比川、久部良の3つの集落がある。面積は 28.96 km<sup>2</sup>で人口は 1710 人である（令和 3 年 1 月末現在）<sup>2</sup>。

### 2.2 与那国方言

与那国方言は与那国島の主に 60 代以上の高年層で話されている。久部良で沖縄本島の影響が強いことを除けば、集落間の方言差はほぼない。与那国方言は母音音素が /a/, /i/, /u/ の 3 つ、子音音素が /p/, /b/, /m/, /t/, /ʔ/, /d/, /n/, /r/, /c/ [tʰ], /s/, /k/, /k/, /g/, /ŋ/, /h/, // の 16 個で他に半母音音素 /j/, /w/ と撥音 /N/ を有する（小型大文字の /p/, /ʔ/, /k/, /c/ は無気喉頭化音）<sup>4</sup>。無気喉頭化子音 /k/, /ʔ/ は /k/, /g/, /t/, /d/ と弁別的である（〔例〕 ka 「司」, ka 「皮」, ga 「我」）。A 型、B 型、C 型の三型アクセント体系であり、A 型は概ね高平調、B 型は概ね低平調で、C 型は A 型に似るが後続するアクセント単位のピッチを下げる（上野 2010）。

与那国方言は、日本最西端の国境の島だけあって、日琉諸語の中でもとりわけ著しい音韻変化、

<sup>1</sup> 厳密には、西崎の北北西にトゥイシと呼ばれる島（岩）がある（与那国方言辞典編集委員会編 2021: 3）。

<sup>2</sup> 以上の情報は与那国町ウェブサイト（<https://www.town.yonaguni.okinawa.jp/docs/>）から引用した（2021 年 3 月 10 日にアクセス）。

<sup>3</sup> 「白地図専門店」（<http://www.freemap.jp/item/okinawa/okinawa2.html>）の無料素材を加工した。

<sup>4</sup> 促音、長音の認定については保留する。// は音節の切れ目を表す音素として導入する。

形態変化が生じている。

(1) 日琉諸語の同源語同士の比較<sup>5</sup>

	上代	沖縄 (首里)	宮古 (伊良部)	石垣 (四箇)	与那国
a. 月	都奇	tsiʔi	ts̥iʔi	ts̥ik̥i	/ri/ [tʔi]
b. 白	之路	ʃiru	ssu	s̥isu	/cu(dari)/ [ts̥u(da:ri)]
c. 草	久佐	kusa	fusa	ʔusa	/ca/ [ts̥a]
d. 雲	久毛	kumu	fumu	ʔumu	/Nmu/ [m̥mu]
e. 綿	和多	wata	bata	bada	/bara/ [bat̥a]
f. 山	夜麻	jama	jama	jama	/dama/ [dama]

しかしながら、与那国方言の言語変化についての先行研究は、音韻変化でさえ、かりまた(2013)、内間(2013)などしかなく、他には平山・中本(1964)や加治工(1984)が日本語(共通語)との音対応という形で言及しているのに加え、高橋(1992)が動詞・形容詞の通時の変化について述べている程度である。この方言に生じた複雑な音変化からすれば、先行研究の量は決して多いとは言えない。

与那国方言は、日琉諸語の中で唯一(語頭の)\*/j/が/d/になる((1f)を参照)など特徴的な方言であり、その音韻変化と形態変化について整理することは、日琉諸語全体の歴史にとっても価値があると考えられる。そのため本稿では、与那国方言の音韻変化と形態変化について、特に先行研究で議論が少ないと思われる点を中心にとりあげる。

### 3. 与那国方言と日本語(共通語)との比較

共通語と与那国方言には表1のような音対応が見られる(cf.加治工1984, 高橋1992など)。

表1 共通語と与那国方言間の音対応(共通語と与那国方言で同音になる場合以外)

共通語	与那国方言	語例
/e/	/i/	ki「毛」, ti「手」, hira「籠」, udi「腕」, ui「上」, hui「笛」
/o/	/u/	nu「野」, hu「穂」, uja「親」, duru「泥」, sudi「袖」, kui「声」
/a'o/, /a'u/	/u/	su「竿」, nuruN「直る」, kuN「買う」, aruN「洗う」
/sj/ [ʃ]	/s/	subu「勝負」, suju「醤油」, saNsu「山椒」, isa「医者」
/z/, /zj/	/d/	da「座」, diN「膳」, kadu「風」, duru「上等」, tiNdu「天井」
/j-/	/d-/	du「湯」, dama「山」, dumi「嫁」, duru「夜」, dumuN「読む」
/r-/	/d-/	daku「楽」, dakju「辣韭」, duja「牢屋」, dusuku「蠟燭」
/w-/	/b-/	bara「藁」, baruN「割る」, baruN「笑う」, bararuN「渡る」
/-w-/	∅ (ゼロ)	a [a:]「粟」, ka「皮」, tara「俵」, dwaruN [d̥warun]「弱る」
/-k-/	/-g-/	haga「墓」, sagi「酒」, dugu「横」, daguN「焼く」

<sup>5</sup> 上代語は上代語辞典編修委員会編(1967)、沖縄方言は国立国語研究所編(1963)、宮古方言は富浜(2013)、石垣方言は宮城(2003)、与那国方言は池間(2003)を基に筆者が調査したデータ(話者は崎原用能さん。1947年祖納生まれ男性)による。

表1 続き

/-g-/ <sup>6</sup>	/-ŋ-/	suŋa 「生姜」, kaŋaŋ 「鏡」, aŋiruŋ 「上げる」, niŋuŋ 「願う」
/kj-/ , /cj-/	/s-/	su 「今日」, sa 「茶」, sakuci 「嫡子」, suga 「急須〈チヨカ〉」
/-kj-/ , /-cj-/	/-r-/	huraji 「吹上餅〈フキヤゲ〉」, huŋa 「包丁」, kaŋa 「蚊帳〈カチヨウ〉」
/ki-/ , /ci-/ , /cu-/	/ci-/ [tʃi-]	ciŋu 「肝」, ciŋi 「霧」, cira 「面」, ciŋu 「壺」
/-ki-/ , /-ci-/ , /-cu-/	/-ti-/	iti 「息」, uti 「内」, muti 「餅」, siti 「節」, bati 「罰」
/gi/ , /zi/ , /zu/	/di/	kudi 「釘」, hudi 「風習〈風儀〉」, kidi 「傷」, dudi 「上手」
/si/ , /su/ , /hi/	/ci/	cima 「島」, huci 「星」, ci 「巢」, daŋimuŋ 「休む」, ci 「火」
/ku/	/hu/ [ɸu]	huŋ 「組」, hura 「鞍」, huru- 「黒」, hucinuci(ki) 「楠」
/-ri-/	/-i-/	hai 「針」, ui 「瓜」, amai 「余り」, hagai 「秤」

語頭と語中・語末で対応が異なる場合、語頭を /ki-/、語中と語末を /-ki-/ のように示した。共通語と与那国方言との音対応から、与那国方言に生じたと考えられる音変化を整理する。

## (2) 与那国方言に生じた音変化 (cf. かりまた 2013)

- a. \*/e/ > /i/ [例] \*te > ti 「手」, \*nabe > nabi 「鍋」, erab- > irab- 「選ぶ」
- b. \*/o/ > /u/ [例] \*no > nu 「野」, \*mono > munu 「物」, \*sode > sudi 「袖」
- c. \*/a'o/ > /au/ > /oo/ > /u/<sup>7</sup> [例] \*kau > koo > ku 「香」, \*sa'o > sau > soo > su 「竿」
- d. \*/sj/ > /s/ [例] \*sjoubu > subu 「勝負」, \*saŋsjou > saŋsu 「山椒」
- e. \*/z/ , /zj/ [(d)ʒ] > /d/ [例] \*kaze > kade > kadi 「風」, \*zjama > dama 「邪魔」
- f. \*/j-/ > /zj-/ > /d-/ [例] \*jama > dama 「山」, \*jom- > dom- > dum- 「読む」
- g. \*/r-/ > /d-/ [例] \*raku > daku 「楽」, \*rouja > douja > duja 「牢屋」
- h. \*/w-/ > /b-/ [例] \*warabi > baraŋ 「蕨」, \*watar- > batar- 「渡る」
- i. \*/-w-/ > Ø [例] \*sawo > sa'o > su 「竿」, \*awi > ai 「藍」
- j. \*/p-/ > /h-/ [例] \*pana > hana 「花」, \*pur- > hur- 「降る」
- k. \*/-p-/ > /-w-/ > Ø [例] \*apa > awa > a'a > a 「粟」, \*nape > nawe > na'e > nai 「苗」
- l. \*/-k-/ > /-g-/ [例] \*sake > sage > sagi 「酒」, \*wakar- > bagar- 「わかる」
- m. \*/-g-/ [-g-] > /-ŋ-/ [例] \*kagami > kaŋaŋ 「鏡」, \*agar- > aŋar- 「上がる」
- n. \*/kj-/ , /tj-/ > /cj-/ [tʃh-] > /s-/ [例] \*kjou > cjou > sou > su 「今日」, \*tja > cja > sja > sa 「茶」
- o. \*/-kj-/ , /-tj-/ > /-cj-/ [-tʃh-] > /-r-/ [例] \*pautjau > hooŋja > hooŋa > huŋa 「包丁」
- p. \*/si/ > /ci/ [例] \*sima > cima 「島」, \*usi > uci 「牛」, \*posi > huci 「星」
- q. \*/su/ > /si/ > /ci/ [例] \*sune > cini 「脛」, \*usu > uci 「臼」, \*susu > cici 「煤」
- r. \*/pi/ > /si/ > /ci/ [例] \*pi > si > ci 「火」, \*pigaŋ > ciŋaŋ 「彼岸」
- s. \*/ki-/ , /ti-/ , /tu-/ > /ci-/ > /si-/ > /ci-/ [例] \*kimo > ciŋu 「肝」, \*ti > ci 「皿」, \*tura > cira 「面」
- t. \*/-ki-/ , /-ti-/ , /-tu-/ > /-ci-/ > /-ti-/<sup>8</sup> [例] \*iki > iti 「息」, \*inoti > nuti 「命」, \*batu > bati 「罰」

<sup>6</sup> 東京など、語中の /-g-/ が鼻濁音となる地域もあるが、ここではわかりやすさと与那国方言の鼻濁音の強調のため、通常の /-g-/ の形で提示した。

<sup>7</sup> 変化の途中段階のアスタリスク (\*) は省略した。

<sup>8</sup> \*/tu/ > /ti/ は siri < \*/setu/ 「書物」, supuri < \*/sjomotu/ 「書物」, suŋari < \*/sjaugwatu/ 「正月」のような漢語にの

- u. \*/gi/, /zu/, /di/, /du/ > /zi/ > /di/ [例] \*kugi > kudi 「釘」, \*zjauzu > dudī 「上手」  
 v. \*/ku/ > /hu/ [例] \*kura > hura 「鞍」, \*kuro- > huru- 「黒」  
 w. \*/-ri-/ > /-i-/ [例] \*pari > hai 「針」, \*wodori > budui 「踊り」

(語頭の) 無気喉頭化音は、共通語と次のように対応する (cf. 高橋 1992: 874)。

- (3) a. /C[-voice]V[+high]t/ :: /T/ [例] sita :: Ta 「舌」, huta :: Ta 「蓋」, hitori :: Tui 「一人」  
 b. /C[-voice]V[+high]k/ :: /k/ [例] cuka :: ka 「柄」, siku :: ku- 「敷く」, hukuro :: kuru 「袋」

(2), (3) 以外にも、例えば kusa :: ca 「草」, kuso :: cu 「糞」の対応における \*/kus-/ > /c-/ や、hiro'u :: \*suN 「拾う」, hirogeru :: sunjiruN 「広げる」の対応における \*/pir-/ > /s-/<sup>9</sup>などの音連続の変化がある。多くの語は(規則的な)音変化が想定され、形式は大きく異なることがあるものの(cada 「野良仕事」 < \*kusawaza 「草業」など)、日本語と同源であることがわかる。

位置や後続母音などの環境の違いによって、\*/cj-/ > /s-/ と \*/si/ > /ci/, \*/ti-/ > \*/ci-/ と \*/-ci/ > /-ti/ など、ほぼ逆方向の変化も生じているなど、極めて複雑な音対応が観察される<sup>10</sup>。

以上の基本的な音変化を踏まえ、次節では与那国方言の音韻変化について個別に検討する。

#### 4. 与那国方言の音韻変化

##### 4.1 \*s の破擦化

与那国方言では、共通語の /s/ に破擦音 /c/ が対応することがある。

- (4) a. 共通語の /si/, /su/ に対応する場合  
 [例] hosi :: hu<sup>ci</sup> 「星」, usu :: u<sup>ci</sup> 「臼」(「共通語」:: 「与那国方言」。以下同じ)  
 b. (共通語で) 無声化母音が先行する場合  
 [例] ku<sup>se</sup> :: hu<sup>ci</sup> 「癖」, iku<sup>sa</sup> :: iku<sup>ca</sup> 「戦」

共通語と比較して、先行する(無声母音を含む)音節が与那国方言で脱落する場合も /c/ になる。

[例] ku<sup>sa</sup> :: ca 「草」, ku<sup>so</sup> :: cu 「糞」, ku<sup>suri</sup> :: cu<sup>ri</sup> 「薬」, ki<sup>seru</sup> :: ci<sup>ri</sup> 「キセル」

共通語で無声化母音が先行しない /s/ には与那国方言でも /s/ が対応する。

み見られ、和語では naci < \*/natu/ 「夏」, hu<sup>ci</sup> < \*/putu/ 「ヨモギ(九州方言のフツに対応)」, maciri < \*/maturi/ 「祭り」のように /tu/ :: /ci/ となっている。これは、和語では \*/tu/ > \*/si/ となって \*/su/ (> \*/si/) に合流したためと考えられる。その動機については、\*/su/ > \*/si/ [si] による体系上の圧力により \*/tu/ > \*/ti/ [tʰi] となったものの、/ti/ の結合が不安定なことから [tʰ] が回避され [si] に転じた一方、\*/ti/ > [ʧi] では口蓋化により破擦音で安定しており摩擦音に変化しなかったためと考える。すなわち、与那国方言では \*/su/ > [si] が \*/i/ > [i] より先に生じ、\*/sa/ [sa], \*/si/ [ʃi], \*/si/ [si], \*/se/ [ʃe], \*/so/ [so] と、北琉球のように \*/si/ [ʃi] と \*/si/ [si] が区別される時代があったと想定することになる。

<sup>9</sup> hiruma :: cuma 「昼間」のように \*/pir-/ > /c-/ が本来の変化で、/s/ になるのは後の議論のように変則的に [ss] > /s/ と短子音化したためと思われる。

<sup>10</sup> kuse :: hu<sup>ci</sup> 「癖」, kusunoki :: hu<sup>cinuci</sup>(ki) 「楠」では \*/kus-/ > /c-/ ではなく \*/kus-/ > /huc-/ が想定され、siru :: ci<sup>ru</sup> 「汁」, sirusi :: ci<sup>ru</sup>ci 「印」では \*/sir-/ > /c-/ ではなく \*/sir-/ > /cir-/ が想定されるなど、同一と見られる条件でも音対応(音変化)が異なる例もよく見られる。

〔例〕 *kaša* :: *kaša* 「笠」, *aše* :: *aši* 「汗」, *išo* :: *išu* 「磯」, *mišo* :: *Nšu* 「味噌」

共通語における無声化母音の後の /s/ に対して与那国方言では破擦音が対応するのは、一般的に無声化母音が音声的には摩擦音相当であることを考えると、摩擦音の連続による異化の結果と考えられる。

波照間方言でも、(5) のように共通語の /s/ に破擦音 /ç/ が対応することがある (cf. 大野 1989: 10)。

(5) *kāça* 「笠」, *pūçī* 「星」, *fūçiri* 「葉」, *fūça* 「草」 cf. *asi* 「汗」, *usi* 「臼」 (平山 (編) 1988 より)

ただし、破擦化する条件は与那国方言と異なり、無声化母音が先行する環境に限られる (「臼」波照間 *usi*, 与那国 *uci*)。また、与那国方言と異なり、非狭母音も無声化し、後続する \*/s/ が破擦化する (「笠」波照間 *kāça*, 与那国 *kasa*)。このことから、与那国と波照間における /s/ の破擦化は並行変化と考えられる。また、与那国方言では、共通語と同じ条件で母音が無声化していた可能性を示唆する (〔例〕 *ca* < /kūsa/ < \*kusa 「草」)。

一方で、共通語の /si/, /su/ が、与那国方言では先行する母音に関わらず常に破擦音になるのはなぜだろうか。無声化母音のように、破擦化には摩擦音の連続による異化が背景にあるとすれば、共通語の /si/, /su/ が与那国方言で /çi/ になるのは、狭母音の前で /s/ が重子音化していた、すなわち [ssi] (~ [ʃʃi] ~ [ssi]) となっていたためと考える。

/s/ が重子音化していた可能性と関連して、与那国方言では次の対応が見られる (cf. 高橋 1992: 874)。

(6) /sV<sup>[+high]</sup>/ :: /ç/ 〔例〕 *sirami* :: *çaN* 「虱」, *usiro* :: *uçu* 「後ろ」, *wasureru* :: *baçiruN* 「忘れる」

この対応も、\**sirami* > [ssam] > *çaN*, \**usiro* > [usso] > *uçu* のように、同化による長い [ss] から破擦音に転じた可能性がある<sup>11</sup>。

もし、\*/si/, /su/ の破擦化が重子音化によるとすれば、なぜ /s/ は重子音化したのだろうか。これに関して、他の南琉球語諸方言と同様に、与那国方言でも /i/ > /i/ の中舌母音化および \*/su/ > [si] によって、\*/si/ と \*/su/ が一旦 \*/si/ に合流した可能性がある<sup>12</sup>。この \*/si/ の \*/i/ があらゆる環境で無声化して [sː] ~ [sz] になった。

(7) \*/sita/ [sːta] 「舌」, \*/usi/ [usː] ~ [usz] 「牛」, \*/sima/ [szma] 「島」

しかし、無声子音が後続する環境以外で母音の有声性が復活する過程で、[z] > [si] という unpacking (日野 2003) が生じ、[sz] > [ssi] と転じたものと推定する。この長い [ss] が、異化によっ

<sup>11</sup> 伊良部方言の *ssam* 「虱」, *ussu* 「後ろ」, *baʃiçī* 「忘れる」なども、長い [ss] の参考になる。*kica* 「早くも：すでに」も、首里 *kissa*, 石垣 *kissa* などから \*/ss/ > /ç/ が推定できる。

<sup>12</sup> 宮良 (1930) に見られる与那国ウツイ *utsi*, ウッチ *uttsi* 【[utʃi]】や比川 (鬚川) ウツイ *uttsi* (以上「牛」) は、\**tsi* から [ʃi] になる過渡期の状態を記録したものかもしれない。筆者の調査によれば、波照間方言では [i] が [i] に合流しつつあるが、/si/ と /si/ は共時的に [si] と [ji] のような形で区別される。

て間に破裂要素を生じ, [ss] > [sts] > [tts] > [ts] と破擦音に発達したと考える<sup>13</sup>。

(8) \*usi > [uʃi] > [usʒ] (us̄i) > [us.s̄i] > [us.ts̄i] > [ut.ts̄i] > [utsi] > [uʃi] 「牛」

[uʃi] > [us.s̄i] のような、狭母音の脱無声化と音節量の調整は、鹿児島方言での \*moci > [moʃi] > [mo.ʃi] 「餅」など（上村 1956: 32）と同様の原理が働いていると考えられる<sup>14</sup>。すなわち、無声化した（しかけた）母音が再度有声化され音声的に強化される<sup>15</sup>過程で、直前の音も長く発音されることで強化され釣り合いを取ったものと思われる。/s/ の重子音化は宮古語諸方言の [ssi] 「菓」にも見られる（平山他 1967）。与那国方言ではこの変化が1拍語だけでなくあらゆる環境で生じたものと考えられる。

nawasiro :: nasu 「苗代」のように共通語の /sir/ が /c/ に対応せず /s/ になっている例も見られるが、\*nawasiro > [na:sso] > [na:so] (> nasu) のように、超重音節を避けた結果 /s/ が短子音化したため \*naçu と破擦音にならなかったと説明される。ucu < \*usiro 「後ろ」との違いは、このように長さを考慮しないと説明できないため、/c/ の前に重子音 [ss] の段階があった傍証になる<sup>16</sup>。また、このことは、与那国方言もかつては母音と子音の長さが弁別的だったことを示唆する。

与那国方言では、共通語の語頭の /hi/ に /ci/ が対応する（表1参照）。この対応は、\*/hi/ > /si/ [ʃi] > /ci/ のように、/hi/ が口蓋化によって /si/ と合流した結果とも考えられる<sup>17</sup>。しかし、そうだとすれば、与那国方言でのハ行子音の h 音化は、/s/ の破擦化に先行したことになり、かなり早くに生じたと考える必要があるが、同じ南琉球語諸方言に属する宮古語池間方言や八重山語石垣四箇方言を参考にすると、与那国方言での h 音化はそこまで古くなかった可能性もある<sup>18</sup>。一方、与那国方言では共通語の /hi/ と /si/ に同じ /ci/ が対応するため、両者はある段階で合流していたものと思われる。そのため、与那国方言の /hi/ と /si/ の合流は、口蓋化 ([hi] > [çi] > [ʃi]) ではなく、次の変化を経たものと考えられる。

(9) \*pi > [pʃi] > [ʃʃi] > [s̄i] > [s̄i] > [ssi] > [stsi] > [ttsi] > tsi > ʃi<sup>19</sup>

<sup>13</sup> 長い [ss] が破擦音に転じるのに関連して、東京でもマツグ「真っ直ぐ」、ナマッチロイ「生っ白い」、クツチャベル「くっ喋る」のように、促音の直後のサ行がしばしば破擦音になることが挙げられる。これがサ行子音の古い音の残存か、それとも与那国方言のような改新かは議論の余地がある。

<sup>14</sup> 「長音形は無声化母【マ】音を有声に発音しようとする、先立つ半長母音を十分延ばすと楽であるという所から出来たものと思う」（上村 1956: 32）。

<sup>15</sup> ソノリティの差が大きくなる方向の変化・交替を強化、逆にソノリティの差が小さくなる方向の変化・交替を弱体化と呼ぶことにすれば、母音間の子音の有声化と無声子音間の母音の無声化はともに弱体化になり、無声子音前後の母音が有声化するの強化となる。

<sup>16</sup> ただし、musiro :: musu 「筵」ではこのような説明は不可能で、[mussu] からの不規則な単子音化を仮定するしかない。与那国方言の内的再建だけでは循環論に陥る可能性があるが、周辺方言との比較（石垣 musu など）によってその妥当性が示せるかもしれない。

<sup>17</sup> /hi/ > [ʃi] は東京でのシとヒの混同の他にも、与論方言の ʃi: (< /hi:/ < \*ke) 「毛」、ʃijun (< /hijun/ < \*ke(r)-) 「蹴る」（cf. 菊・高橋 2005）や中国語北京方言の [çi-] < \*hi-（〔例〕喜、郷）など類例は多数見られる。

<sup>18</sup> この立場でも、[p] > [ʃ] はかなり早い段階で生じたと考えざるを得ない。しばしば議論の対象となる、南琉球のハ行子音音価推定の問題（cf. 内間 2013）と関わってくることになる。

<sup>19</sup> [ʃʃi] > [s̄i] は不徹底だったようで、\*/pi/ が与那国方言の /hi/ に対応する例も見られる（hima 「暇」、hirui 「一日（ヒヒトヒ）」など）。hima 「暇」は借用語のためかもしれないが、hirui 「一日」は〈ヒヒトヒ〉に対応するとすれば、hibida (< \*pipiza) 「山羊」（cf. 伊江島 titizja）、hicaN (< \*pisusa-) 「薄い」（cf. 伊江島 tiʃisa ~ titisa）などのように、狭母音の前では \*/i/ > [ʃi] の変化自体が阻止されたことによる規則的な音対応と思われる（伊江



すなわち、中舌母音化 (/i/ > /i/) が地域特徴としてまず生じ、ついで \*/p/ が摩擦音化したときに /i/ への同化で [s] に転じたと推定し、かりまた (2013: 75) の pi > ps > tʃ のように摩擦音を経ずに転じたとは考えない。与那国方言の su 「今日」では \*kjo > [ʃo] のような口蓋化が生じたと見るしかなく (cf. sa < ʃa 「茶」), 他の八重山語よりも口蓋化が広く生じたと考えられるが、/s/ の破擦化からは与那国方言に \*/i/ > /i/ を認めた方がよいことと、他の南琉球語諸方言に見られる音変化から与那国方言にも地域特徴として中舌母音化があった可能性が高いことから、\*/pi/ > /si/ が口蓋化によると考えるより、中舌母音への同化の結果と推定した方が蓋然性が高いと思われる。

#### 4.2 母音間の \*k の有声化

与那国方言では、共通語の母音間の /k/ に [g] が対応する。

- (10) naka :: naga 「中・仲」, take :: tagi 「竹」, hako :: hagu 「箱」

通時的には、母音間で \*/-k-/ > [-g-] と有声化したと思われる ((21) を参照) が、[-g-] が古態だとする主張もある (木部 1990, 早田 2017 など)<sup>20</sup>。東北、八重山、鹿児島の一部のように、日琉諸語の周辺部に母音間の \*/-k-/ が [-g-] となる方言が見られるから、語中では有声音が古く、近畿など中央部で無声化した可能性も考える必要がある。

与那国方言では、共通語の語中の /ki/, /ku/ に対応する音節は /ti/, /hu/ で、[g] のような有声音にならない<sup>21</sup> ため、無声音が本来だとすれば、狭母音での音変化 (\*ki/ > /ti/, \*ku/ > /hu/) が /k/ の有声化よりも早く生じたと考えるだけだが、有声音が本来だとすれば、狭母音の前で [-g-] > [-k-] という無声化と \*ki/ > /ti/, \*ku/ > /hu/ という変化が両方生じたことになる。

- (11) iki :: iṭi 「息」, maki :: maṭi 「牧」, hoki :: huṭi 「箒」, niku<sup>(si)-</sup> :: miḥura 「憎い」

狭母音の前の子音が無声化するのは不自然な変化ではない。ところが、撥音の後でも、共通語の /k/ に与那国方言では有声音ではなく無声子音の /k/ が対応する。

- (12) muka<sup>si</sup> :: Nka<sup>si</sup> 「昔」, ju<sup>ku</sup>biku 「湯引く」 :: du<sup>ku</sup>NkuN 「茹でる」, ha<sup>ki</sup>keru :: haN<sup>ki</sup>iruN 「弾ける」

一方、共通語の母音間の /-g-/ には与那国方言の [ŋ] が対応するが、撥音の後では [g] が対応する。

- (13) ka<sup>ga</sup>mi :: kaŋa<sup>N</sup> 「鏡」, a<sup>ge</sup>ru :: aŋiru<sup>N</sup> 「上げる」, hi<sup>ge</sup> :: Ngi 「髭」, ju<sup>su</sup>gu :: du<sup>su</sup>ŋu<sup>N</sup><sup>22</sup> 「濯ぐ」

島方言形は生塩 2009 による)。

<sup>20</sup>「カ行タ行音が語中では [g] [d] であるのが古い」(木部 1990: 47), 「清子音が共鳴音に挟まれた場合には、今の朝鮮語のように、多く有声音で発せられたと思われる」(早田 2017: 53)。

<sup>21</sup> \*/ku/ は agu 「灰汁」, iguci 「幾つ」, magura 「枕」のように gu と有声化している場合が多い。

<sup>22</sup> 筆者の話者では語中で /-Ng-/ > [-ŋŋ-] が生じており [duŋŋu<sup>N</sup>] 「濯ぐ」となる。そのため、(14) についても kuŋu<sup>N</sup> ↔ kuḍi 「漕ぐ」と duŋŋu<sup>N</sup> ↔ du<sup>N</sup>ḍi 「濯ぐ」のように共時的には (/ŋ/ が音声的に長く発音されることもあり) 予想のきわめて困難な交替が生じる (他にも aŋŋu<sup>N</sup> ↔ a<sup>N</sup>ḍi 「炙る」など)。ここでは対立の明瞭な古い世代の発音を挙げた。

もし /-k-/ では [-g] が古態なら、狭母音の前だけでなく撥音の後でも無声化したことになるが、無声化環境としては不自然である<sup>23</sup>。むしろ、母音間という調音が最も緩みやすい環境で /-k-/ > [-g-] (摩擦化した [-ɣ-] を含む) という声の同化が生じたと考えた方が、少なくとも与那国方言に関する限り自然である。そうであれば、東北や鹿児島などでも並行的に有声化した可能性が高く、日琉諸語の大部分で [-g-] > [-k-] と変化したと見る必要はなくなる。

ただし、声の同化の観点からは、撥音の後でも /-k-/ > [-g-] となつてよいはずである。撥音の後で /k/ が有声化しなかったのは、 /-g-/ > [-ŋ] が撥音の後で生じなかったため、 /-k-/ > [-g-] が妨げられた結果と考える。日琉祖語の \*g/ には前鼻音があり、 [g] > [ŋ] と変化したが、撥音の後では前鼻音が吸収されて /Ng-/ [N̄g-] > [Ng-] となったと推定する。そうであれば、(13) の Ngɪ「髭」、duNɣuN「濯ぐ」などでの \*pi > N, \*su > N の撥音化は、 [-g] > [ŋ] に先行していたことになる。仮に、 [-g] > [ŋ] の方が早く、その後 [Nŋ] > [Ng] のような(鼻音連続の)異化が生じた結果だとしても、 [Nŋ] > [Ng] が /-k-/ > [-g-] より早かった結果、撥音の後での /-k-/ の有声化は (/g/ との対立を保持するため) 生じなかったことになる<sup>24</sup>。

共通語との対応だけでなく、接続形「～(し)て」との交替による内的再建からも、与那国方言の撥音の後の /g/ が /ŋ/ と対応することを支持する。

- (14) kaguN「書く」↔ kari「書いて」、duNkuN「茹でる」↔ duNɾi「茹でて」、kuŋuN「漕ぐ」  
↔ kudi「漕いで」、duNɣuN「濯ぐ」↔ duNdi「濯いで」

/g/ ↔ /ɾi/, /ŋ/ ↔ /di/ と並行的に、/Nk/ ↔ /Nɾi/, /Ng/ ↔ /Ndi/ となっているから、共通語との音対応に拠らずとも、 /g/ < \*k ↔ /ɾi/ < \*ki, /ŋ/ < \*g ↔ /di/ < \*gi, /Nk/ < \*Nk ↔ /Nɾi/ < \*Nki, /Ng/ < \*Ng ↔ /Ndi/ < \*Ngi が再建される<sup>25</sup>。

有声化が観察される東北、鹿児島の一部、(与那国を含む)八重山では、\*g > /ŋ/, \*d > /n/ など、前鼻音を示唆する音変化が観察される(東北方言はそもそも多くの方言が前鼻音を保持している)。これらの方言の中には、語中有声化だけでなく語中無声化も見られる。

<sup>23</sup> 撥音の後という環境のため、撥音化の後に [-g-] が無声化したことになる(〔例〕\*mugasi > Ngasi > Nkaci)。しかし、有声音の /N/ の後で、[-g-] が無声化する音声学的動機がない。撥音化では母音の脱落が生じるから、これを \*mu > /mɥ/ > N と表せば、u の影響で [-g-] > [-k-] となったように見えるが、母音脱落を便宜的に “u” と表記するのはよいとしても、鼻音のような有声音に後続する “u” が音声的にも無声音だったとは考えがたい。声の同化の観点から、撥音の後で無声化するのとは不自然だと考える。東北方言でも、撥音の後では清音が有声化しない(井上 1968: 82-83) ことから、与那国方言と同様に、無声化ではなく有声化が東北方言でも生じたと思われる。

<sup>24</sup> 本部(1990: 39)は語中の清音は有声音が本来だとする立場で、顎娃町方言・東北方言でも撥音の後で清音が [g], [d] ではなく [k], [t] となることについて、[ŋ̄g], [n̄d] が [ŋg], [nd] との対立を為せないことから [ŋŋ], [n̄d] 対 [ŋk], [nt] となって対立を保ったとする。すなわち、対立を保持するために [ŋg], [nd] > [ŋk], [nt] と無声化したとする主張だが、鼻濁音に変化した ([ŋ̄g] >) [ŋŋ] に対して [ŋg] > [ŋk] はあり得ても、[n̄d] と [nd] は実質的に区別できず、撥音化の時点で合流してしまうはずである。これに対し、清音は無声音が本来とする本稿の立場ではいずれの方言でも合流が生じず、東北や顎娃町で [ŋg] > [ŋŋ] という同化が生じたと考えればよい。この同化は与那国方言で実際に進行中で、[duŋɣuN] > [duŋŋuN]「濯ぐ」などが見られる。東京でも、鼻濁音を持たない話者でも /Ng/ はしばしば [ŋŋ] と発音される(他ならぬ筆者にその傾向がある)。

<sup>25</sup> 5.1 で述べるように、厳密には接続形は \*kakje「書いて」などと再建される。

- (15) a. [波照間方言の例] t<sup>h</sup>ɛp<sup>h</sup>i 「旅」, p<sup>h</sup>ɛŋɛ 「花」, p<sup>h</sup>ɛmɛ 「浜」, t<sup>h</sup>ɛru 「樽」 (麻生 2020 より)  
 b. [田野畑方言の例] kɯta 「管」, sipa 「柴」, usso < \*usiro 「後ろ」 (上野 2021 より)

これは、前鼻音の有無によって子音の清濁が区別されることで、声帯振動については変化が生じやすかったためと思われる。前鼻音については古態を保持しているものと考えられるが、これらの方言での語中有声音は古態の保持と見る必要はなく、並行変化の可能性が高いと言える。

#### 4.3 順行口蓋化

拗音のうち、[ʃ-] :: /s-/ の対応は先行研究にも挙がっている (かりまた 2013: 76 など)。

- (16) [ʃa] :: /sa/ 「茶」, [ʃakufi] :: /sakuci/ 「嫡子」, [ʃu:zara] :: /sudara/ 「中皿」

それ以外の拗音の対応は次のようになる。

表2 共通語の拗音と与那国方言の対応

共通語	与那国方言 (語頭)	与那国方言 (語中) <sup>26</sup>
/cj/ [ç]	/s-/ [例] sakuci 「嫡子」	/-t-/ [例] hu <sup>ra</sup> 「包丁」
/kj/	/s-/ [例] su 「今日」	/-t-/ [例] ka <sup>ra</sup> n 「混ぜる〈掻き合わせる〉」
/sj/ [ʃ]	/s-/ [例] su <sup>ŋ</sup> a 「生姜」	/-s-/ [例] gu <sup>su</sup> 「後生」
/zj/ [(d)ʒ]	/d-/ [例] du <sup>di</sup> 「上手」	/-d-/ [例] du <sup>du</sup> 「養生」
/ij/	/d-/ [例] du <sup>ri</sup> 「料理」	/-j-/ [例] du <sup>ju</sup> 「糸〈繰り緒〉」

ところで、4.2 で述べたように、共通語の /k/ は語中で与那国方言の /g/, /k/ に対応するが、中には /t/ に対応するものがある。

- (17) ika :: ita 「烏賊」 (ika とも), cikai :: taN 「近い」, mikka :: N<sup>ra</sup> 「三日」

(17) は \*iga/, \*kaN/, \*Nka/ のように /g/, /k/ が期待されるところに /t/ が対応する。これらの共通点として、(17) はいずれも共通語の /k/ の前に /i/ があることに気づく。共通語の語中の拗音 /-kjV-/ が与那国方言では /-tV-/ になることから、(17) でも \*/-ik-/ > [-ikj-] と変化したと考えられる。すなわち、母音 \*/i/ が先行する環境で、後続子音が口蓋化したと見られる。

- (18) \*tika- > [ʃikja-] > [ʃʃa-] > ta- 「近い」<sup>27</sup> (cf. sikara 「力」)

この口蓋化が規則的でなかったことは、cikara :: sikara 「力」 (\*tara) の対応からも明らかである。このように、\*i による順行口蓋化は、与那国方言では無条件に生じた変化ではないものの、変則変化として順行口蓋化を考慮することで、次のようないくつかの語形が説明できる。

- (19) ramiruN 「教える」 < [kikjaŋme-] < \*kikasime- 「聞かしめる」 (cf. kanuN 「聞かない」), raja 「光

<sup>26</sup> karaN 「混ぜる」と duju 「糸」は \*kaki+awas- > [kakjawas-], \*jori+wo > [jorjo] の変化が生じていたと考える。

<sup>27</sup> 高橋 (1992: 881) に同じ趣旨の変化が示されている。

る虫」 < [pikjarja] < \*pikari-a (cf. sikari 「光」), iragiruN 「注ぎ掛ける」 < [ikjake-] < \*i+kake- 「沃掛ける」 (cf. kagiruN 「掛ける」), …

同様に, /g/ にも順行口蓋化が認められる。

- (20) NdaN 「塩辛い」 < [nĩqja-] < niga- 「苦い」 (cf. Ngana 「苦菜」), NduguN < [ĩgʲok-] < \*igok- 「動く」

/-ig-/ > [-ĩgʲ-] > /-Nd-/ によって, /g/ ではなく /d/ が対応している。

順行口蓋化に関連して, \*Cjo > \*Ce > Ci という変化も与那国方言にあったと思われる。

- (21) \*itoko > [itjoko] > [itʲeko] > irigu 「従兄弟」, \*piso<sup>28</sup> > [piʲfo] > [ʰiʲʰe] > hici 「トグロ」

与那国方言に限らず, Cjo > Ce は諸方言に広く見られる変化だったと考えられる。次のような変化が古語や諸方言に推定される。

- (22) \*iriko > [irikjo] > \*irike 「鱗」<sup>29</sup>, pitotu > [pitjotu] > pitetu 「一つ」, kinopu > [kinjopu] > kinepu 「昨日」, utusi'omi (“宇都志意美”) > [utusjomi] > utusemi (“宇都世美”) 「空蟬」<sup>30</sup>, …

条件異音の関係にある音声は, 条件となる環境が失われる場合に音韻化しやすい<sup>31</sup>。与那国方言では激しい音変化の結果, \*/ki-/ , \*/si-/ , \*/su-/ , \*/ti-/ , \*/tu-/ , \*/pi-/ > /ci-/ など, 広範に合流が起きているから, 順行口蓋化の音韻化も広く起きていた可能性がある。

- (23) \*pito > [piʲfo] > ru 「人」<sup>32</sup> (cf. ra < \*puta 「蓋」), \*pidari > [piʲdʲai] > Ndai 「左」 (cf. Ndai < \*sudari 「簾」), \*ita > [iʲa] > ira 「板」 (cf. 伊良部 [itsa]), \*miso > [miʲfo] > Nsu 「味噌」 (cf. 波照間 mifu), \*asida > [aʲiʲdʲa] > acida 「下駄 <アシダ>」 (cf. 伊良部 [asiza])

その場合, /njV/ > /nV/ , /mjV/ > /mV/ のような直音化も生じたと考えられる必要がある。

- (24) \*kino(p)u > [ʲiŋjou] > Nnu 「昨日」, \*ima<sup>33</sup> > [imja] > ma 「もう」, kaNna < [kannja] < \*kani-a 「蟹」, taNna < [tannja] < \*tani-a 「ダニ」<sup>34</sup>

<sup>28</sup> 上代語へ<sub>2</sub>ソ<sub>1</sub> 「綜麻」 (上代語辞典編修委員会編 1967: 649) に対応すると思われるが, 母音が合わない。

<sup>29</sup> 与那国方言形は iru で \*ikjo < [iikjo] < \*iriko が再建される。

<sup>30</sup> “ひてつ”, “きねふ”, “うつせみ” は文献にも実証され, “ひてつ”, “きねふ” は方言にも対応形が広く観察される ([例] 伊良部 pititsi 「ひとつ」, 淡路キニョー 「昨日」)。関連して, 上代語 pirip- 「拾う」と itibiko 「葺」 (itigo の古形) にも類似の変化が疑われる。前者は pirop- から [pirjop-] > [pirep-] を経て成立したように見え, itibiko の itibi- は琉球祖語に再建される \*itobi (cf. 首里 ʔifubi) に対応し, \*itobi > [itjobi] > [itebi] > itibi という過程があったように思われる。\*e でなく i になっているのは, 上代語に生じたと考えられる \*e > i の音変化 (服部 1979: 98) の前に \*Cjo > \*Ce が完了していたからだろう。

<sup>31</sup> 条件の消失とともに異音が音韻化せずに消失したり, 条件を保持したまま音韻化したりすることももちろんあり得る。

<sup>32</sup> 黒島方言 puʲu 「人」 (原田 2016) は, \*pito > [piʲfo] と順行口蓋化した形式を傍証する (cf. sa: 「茶」)。

<sup>33</sup> \*ima には ma 「もう」 が対応する。「今」は nai という形式で, \*imama に対応すると考えられる。

<sup>34</sup> hara 「蜂」では aja 「蟻」, haduja 「雀」, kubuja 「コウモリ」, kurtja 「鴨」と同様に \*haci に -a が添加されている。kacjoo :: kara 「蚊帳」 (cf. hocjoo :: hura 「包丁」) のように, hara 「蜂」にも \*cja > ra が生じているから, -a の添加は早かった (\*pati > \*hari となった後に -a が添加されたのであれば \*harja が予想される)。そうだとすれば, kaNna 「蟹」, taNna 「ダニ」では \*nja の直音化があった可能性が高い (-a の添加の時期が違って

与那国方言で拗音の直音化が生じたとすれば、現在の与那国方言で拗音(/CjV/)が見られる(25)のような例は、直音化の後の変化によることになり、音変化の相対年代を考える上で重要である。

- (25) a. tunja 「よその家」, njuri 「ゆっくりすること」, mja 「庭」, namja 「牝牛」, mjudiN 「気遣い」  
 b. kjaŋi 「イヌマキ」, kjaN 「消す」, kjaN 「痒い」, gjagiruN 「邪魔する」, sjanaN 「嬉しい」, cjaN 「酸っぱい」, kurja 「鴨；牝牛」, djadi 「おおごと」, hjani 「お玉」, bja 「えぐみ」, abjaN 「美しい」, tju [tjo:] 「くれ」, tjuN 「手斧」

(24) の直音化が生じた時代には、(25) は現在のような拗音の形式ではなかったことになる。例えば、tunja 「よその家」は \*runuja, kurja 「鴨；牝牛」は \*kuruja のような形だったと考えられる<sup>35</sup>。

#### 4.4 鼻母音の内的再建

日琉諸語では名詞などの屈折(曲用)は比較的珍しいが、与那国方言には場所を表す指示代名詞で次のような曲用が見られる(cf. 山田他 2013: 295)<sup>36</sup>。

- (26) kuma 「ここ」 ↔ kumi 「ここに、ここで」, uma 「そこ」 ↔ umi 「そこに、そこで」, kama 「あそこ」 ↔ kami 「あそこに、あそこで」, Nma 「どこ」 ↔ Nmi 「どこに、どこで」

(26) では、/a/ ↔ /i/ の母音交替によって場所格であることが示される。

(26) と類似した曲用が次のような名詞にも見られる。

- (27) tara 「下」 ↔ tariN 「下に、下で」, naga 「中」 ↔ nagiN 「中に、中で」, huga 「外」 ↔ hugiN 「外に、外で」, mura 「村」(祖内集落を指す) ↔ muriN 「村に、村で」, kubura 「久部良」(地名) ↔ kuburiN 「久部良に、久部良で」

(27) では /a/ ↔ /i/ と母音が交替するだけでなく、/-N/ の添加を伴う。

(26, 27) の曲用は、助詞 =ni 「に」が /ni/ > [i] と鼻母音化して生じた音変化と考える。すなわち、\*koma=ni > [komaĩ] > [komē:] となった後、[ē:] が先行する /m/ による鼻音化と再分析され音韻的に非鼻母音化し、[komē]/kome/ > kumi となった。ところが、naga「中」では \*naka=ni > [nakaĩ] > [nakē:] の鼻母音 [ē:] は前後に鼻子音がなく鼻音性の再解釈ができず、音韻的に鼻母音であり続けたため、鼻音性の反映として [naqē]/nagē/ > nagiN となった<sup>37</sup>。与那国方言にかつては鼻母音があり、[Ũ] >

た可能性もある)。

<sup>35</sup> 語形が同じなのは偶然で、「鴨」はカワドリ、「牝牛」はコトイに対応する。

<sup>36</sup> さらに、/Nda/ (2人称単数) ↔ /Ndi/ (2人称複数), /sa/ (再帰単数) ↔ /si/ (再帰複数) のように、数に関する曲用も見られる。現時点では、\*-ra のような何らかの複数接辞が付いた反映と考える(例えば、\*ura-ra > [rrara] > [raja] > [ddaja] > [ndai] > [nde:] > Ndi など)。

<sup>37</sup> [Ũ] > /VN/ は unpacking の一例である。nai 「今」も、\*imama > [imjama] > [nnja'ã] > [nnajã] > [nnaē] > [nãē] > \*nai/ [nã] > nai という変化を経たか。madi 「まだ」も、\*imada > [imjada] > [mmjada] > [madja] > [made] > madi という変化を経たと思われる。

/VN/ という変化を生じた可能性はかりまた (2013) に否定接辞の  $n\ddot{u} > nuN$  という例ですでに言及されている。同様に、次のような語末に非語源的な撥音が見られる例も、与那国方言がかつて (音韻的な) 鼻母音を持っていた痕跡 ( $VN < *V$ ) と考える。

- (28)  $cinaN < [sunā] /suna/$  「砂」,  $kaniN < [kanē] /kane/$  「金」,  $NnuN < [tunō] /tuno/$  「角」,  $tidaN < [tedā] < [tēda] /teda/$  「太陽」,  $agidaN < [ake:dzā] < [akē:dza] /ake:za/$  「トンボ」<sup>38</sup>

与那国方言や波照間方言には由来不明の撥音添加が見られるが、少なくとも与那国方言では、その多くは鼻音の前後や前鼻音化濁音の前の母音が鼻音化していた反映と考えられる。

東北方言でも、鼻子音による鼻母音が音韻的に再解釈されて、濁音が前鼻音化濁音に変化した例がある (上野 2017: 73)。

- (29)  $ta\text{-}dami < [tadāmi] /tadami/$  「畳」,  $ki\text{-}zine < [kizine] /kizine/$  「狐」,  $mi\text{-}da < [mida] /mida/$  「見た」,  $mi\text{-}zi < [mīzi] /mizi/$  「道」,  $mugu\text{-}zi < [mūguzi] /muguzi/$  「無口」<sup>39</sup>

このように、子音の鼻音性は鼻母音を介し、撥音へとしばしば音韻化することがある。

なお、 $kumi$  「ここに、ここで」では  $*komā > [komē:]$  のように  $[aī] > [ē:]$  を想定するが、共通語の  $ai, ae$  には原則として与那国方言  $/ai/$  が対応する。

- (30)  $ai$  「藍」,  $mai$  「米  $\langle \text{マイ} \rangle$ 」,  $hai$  「蠅」,  $nai$  「苗」,  $mai$  「前」, …

ただし、与那国方言の  $/i/$  には通時的に  $*ai, *ae$  に遡るものがあり、 $*-a=ni > [aī] > [ē:]$  を傍証する。

- (31)  $diN < [je:n] < *jaini$  「来年」<sup>40</sup>,  $hira < [he:ra] < [paira] < *pasira$  「柱」,  $hiruN$  「行く」 $< [he:r-] < [pair-] < *pasir-$  「走る」,  $kiraN < [ke:ras-] < [kaeras-] < *kaper-as-$  「返す」,  $Nki < [ŋke:] < *mukae$  「〜へ」,  $mimi < [me:me] < [maībe] < [maēbi] < *manebi$  「真似」, …

鼻母音は竹富方言や西表島祖納方言など、八重山語諸方言にいくつか観察される (加治工 1996・久野 1988)。

- (32)  $[kadʒi:ruŋ]$  「隠す」,  $[çirō:]$  「昼間」,  $[jū:]$  「肝」 (以上、加治工 1996 より竹富方言の例),  $[ʔirjā]$

<sup>38</sup> ただし、 $kaNduN$  「寒露」,  $kujun$  「苦勞」,  $ciruN$  「蔓」,  $nugaN$  「糠」,  $hujun$  「怠け者」,  $marjaN$  「鞠」などの  $-N$  にはこのような説明はできない。これらは、 $-N$  の付く名詞の特徴から考えて、与那国方言にかつてあった (動作主性の低い) 主格助詞  $=nu$  (Shimoji 2014) の反映かもしれない。この場合も、 $*=nu > =N$  と母音が脱落して直接変化したのではなく、 $*nuga=nu$  「糠が」 $> [nugaū] > [nugā:] > nugaN$  「糠 (が)」のように鼻母音を経た可能性がある。(28) での推定とは矛盾することになるが、鼻子音に後続した場合に、 $cima=nu$  「島が」 $> [ʔimaū] > [ʔimā:] /cimā:] > [ʔimā] /cima/$  「島 (が)」と鼻母音が非音韻化し、その環境がきっかけとなって主格のゼロ標示が広がったのかもしれない。

<sup>39</sup> 筆者の調査によれば、淡路島中南部の方言では  $/g/, /d/$  に安定して前鼻音が現れるが、北部でも、 $[kōdomo]$  「子供」,  $[nādo]$  「など」のように、鼻子音の前後の  $/g/, /d/$  では前鼻音 (鼻母音) が出ることがある。 $/b/, /z/$  には見られないことや、 $[kōdomo]$  のように  $[m]$  に隣接しない母音に鼻音が出ることから、同化による改新ではなく本来の前鼻音が鼻子音に近い環境で保持されているものと考えられるが、上野 (2017: 73) のように鼻子音に隣接しない母音にも鼻音が改新として生じる例があるため、淡路方言の例も再考の余地がある。

<sup>40</sup>  $*jaini$  などは、他方言との比較を基にした与那国方言の古形を意味する。従って、必ずしも同年代の形式として再建しているわけではない。結果的に、先島祖語や琉球祖語、日琉祖語の形式と一致する可能性はある。

「鱗」, [ʔubja] 「小指」, [ta:jwā:] 「鮒」 (以上, 久野 1988 より西表島祖納方言の例)

同様に, 与那国方言にも (音韻的な) 鼻母音が存在していた可能性は十分考えられる<sup>41</sup>。

## 5. 与那国方言の形態変化

本節では, 与那国方言に起こったと考えられる言語変化のうち, 特定の形態素や品詞に生じたと考えられる変化を中心に述べる。

### 5.1 接続形 \*-je の内的再建

与那国方言の動詞には, 接続形 (-ri が付く形) と過去形 (-raN が付く形) とで語形が異なる場合がある。代表的な活用形を表 3 に挙げる。

表 3 与那国方言の動詞の代表的な活用形 (法政大学沖縄文化研究所 1987 より抜粋・加工)

活用形 \ 語例	kagu-N 「書く」	kiru-N 「する」	hu-N 「食べる」	turu-N 「取る」	tu-N 「倒す」
否定形	kaga-nuN	kira-nuN	ha-nuN	tura-nuN	twa-nuN
接続形 <sup>42</sup>	kari(-ri)	ki(-ri)	<b>hai(-ri)</b>	<b>tui(-ri)</b>	<b>tusi(-ri)</b>
過去形	kari-raN	ki-raN	<b>ha-raN</b>	<b>tu-raN</b>	<b>tu-raN</b>
完了形	kari-aN	ki-aN	h-aN	tw-aN	tusj-aN
命令形	kag-i	kir-i	ha-i	tur-i	tu-i
禁止形	kagu-Nna	ki-Nna	hu-Nna	tu-Nna	tu-Nna
原語幹	kag-	kir-	ha-	tur-	tus-

原語幹は活用形から導かれる抽象的な語幹として筆者が設定したもので, 命令形から命令接辞 -i を取り去ったものに概ね一致するが, tuN 「倒す」のように一致しない例もある。これに対し, kaga-nuN 「書かない」の kaga- のように, 接辞を受ける諸語幹を拡張語幹と呼ぶことにする。kaguN 「書く」や kiruN 「する」では, 接続形 kari(-ri) (書いて), ki(-ri) (して) と過去形 kari-raN (書いた), ki-raN (した) の拡張語幹が同形となっているが, huN 「食べる」や turuN 「取る」では, 接続形 hai(-ri) (食べて), tui(-ri) (取って) と過去形 ha-raN (食べた), tu-raN (取った) の拡張語幹が異なっている。接続形と過去形が同じ形式 (例えば連用形) から作られたとすると, 両方で語形が異なる動詞があることの説明が困難である。特に, tuN 「倒す」のように原語幹が s で終わる s 語幹動詞 (原語幹が X で終わる動詞を X 語幹動詞と呼ぶことにする) の接続形が

<sup>41</sup> (2m) のように, 語中の \*/g/ は与那国方言では /ŋ/ になるが, urar- (< \*ukjagar-) 「浮き上がる」, dwam- (< \*jugam-) 「歪む」, damami (< \*jamagame) 「(山) 亀」などでは語中の /g/ が脱落している。これらは恐らく \*/-ga-/ > [-ŋa-] > [-ā-] という (変則的な) 鼻母音化が生じたためと思われる。他の八重山語諸方言にも見られる語中の \*g の脱落も, 同様に鼻母音化が起こったものと考えられる。

<sup>42</sup> 接続形は -ri を受ける拡張語幹 (と同形の形式) を指し, -ri を継起接辞として「接続形 -ri」を継起形と呼ぶこともできるが, 現在の与那国方言の「接続形 -ri」は共通語のテ形と同様に継起だけでなく付帯状況も表せる ([例] bi-ri airi buN 「酔いながら歩いている」) ため, 連用形と接続形の形態的な区別が失われていることから, kari 「書き」を連用形, kari-ri 「書いて」を接続形と呼んだ方が実態に近い (高橋 1992 の用法)。以下では, 通時的観点から連用形との区別のため kari 「書き」を接続形とするが, 共時的には望ましい名称とは必ずしも言えない。

/-si/で終わることを説明する必要がある。なぜなら、\*-si を再建すると、duraci < \*jurasi 「篩」(「揺らす」の連用形に対応)、(hai)nuguci < \*nokosi 「(食べ)残し」(「残す」の連用形に対応)、tamaici < \*tamesi 「試し」(「試す」の連用形に対応)、maci < \*masi 「よりよいこと」(「増す」の連用形に対応)のように、規則的な音変化からは \*-ci が予想され、\*-se を再建すると、tui 「倒せ」(< \*tause) のように動詞の音変化からは \*-i が予想され、いずれにしても -si とはならない。与那国方言では語中で(非狭母音の前の) /s/ の脱落が生じ、特に s 語幹動詞では規則的に脱落する。

- (33) uranuN < \*otosanū 「落とさない」、uruiba < \*otoseba<sup>43</sup> 「落とせば」、ka < \*tukasa 「司」、sagama < \*sakasama 「逆さま」、…

以上より、urusi 「落として」などの -si を説明するためには、\*-si でも \*-se でもない形式を再建する必要がある。sjaku :: sagu 「癩」、saNsjuo :: saNsu 「山椒」、kosjuo 「胡椒」:: kusu 「唐辛子」のように、共通語の /sjV/ が与那国方言では /sV/ になることから、-si には \*-sje を再建すればよい。すなわち、接続形(接辞)は \*-je、連用形(接辞)は \*-i で、両者は元々別形式だった。過去形は連用形から作られるため、hai < \*haje (食べて)、ha-TaN < \*hai-ta- (食べた) のように異なる形式になることがある。

接続形の形式から、\*Cje について次の音変化を想定する。

- (34) \*-kje > -ri, \*-gje > -di, \*-sje > -si, \*-tje > -ti, \*-dje > -di, \*-bje > -bi, \*-mje > -mi, \*-rje > -i, \*-je > -i ([例] kari < \*kakje 「書いて」、kudi < \*kogje 「漕いで」、husi < \*posje 「干して」、mari < \*matje 「待って」、tubi < \*tobje 「飛んで」、dumi < \*jomje 「読んで」、tui < \*torje 「取って」、kai < \*kaje 「買って」)

kuN 「来る」の接続形は si 「来て」となるが、表 2 の kjoo :: su 「今日」のように共通語の語頭の kjV は与那国方言で sV となるため、\*kje > si とやはり \*Cje から規則的に導かれる。

連用形と接続形が別形式だったことはアクセントからも支持される。基本形が非 A 型の動詞では、過去形(連用形から作られる)は原則として B 型となるのに対し、接続形は C 型となり、アクセントが異なる。このことから、連用形は B 型、接続形は C 型だったと推定されるから、-darana 「～ながら」、-biki 「～べき」のように文節が B 型になる接辞は連用形に、-ŋasija 「～すれば」のように C 型になる接辞は接続形に付く接辞と考えられる。他方言の対応形式と比較することで、両者の区別が(琉球)祖語に再建されるか明らかになるとと思われる。

ところで、連用形が \*-i と再建されるなら、\*posi > \*huci 「干し」などとなることが予想される (cf.

<sup>43</sup> 与那国方言の条件形には、連体形に ba が付く形式の他に、kagja 「書けば」のように -ja が付く形式がある。ところが、huN 「食べる」のような母音語幹動詞では、huba のように連体形 + ba とともに haiba という形式があり、ja が付く形式はない。このことから、kagja は \*kagiba に由来し、子音語幹動詞では \*-C-iba > -Cja の変化が生じたが、母音語幹動詞では \*-V-iba は変化しなかったと推定される(この点、高橋 1992 は活用の整理が不十分である)。s 語幹動詞でも uruiba 「落とせば」となることから、s の脱落は \*-iba > -ja の変化より先に生じたと考えられる。r 語幹動詞で \*-riba > -rja と推定され、s 語幹動詞では s が脱落するため、この条件形は形式的には命令形 + ba に対応する。



huci「星」が、-darana「～ながら」、-biki「～べき」が付く形式は *husidarana*「干しながら」、*husibiki*「干すべき」と *huci* ではなく *husi* である。このことから、与那国方言では連用形が形態的には接続形に合流したことが示唆される。過去形は例外的に本来の音対応を示している（〔例〕*bagaraN* < \**wakasita*-「沸かした」、*ara* < \**asita*「明日」）が、過去形が連用形とは独立した活用形として早く確立したためだろう。現在の与那国方言には連用形と接続形に形態的な区別はなく、別形式だった名残は、基本的にアクセントの違いに反映されていることになる<sup>44</sup>。

接続形 \**-je* は、いわゆるシアリ形（連用形+アリ）に対応するが、\**-i-ari* > [ *-ja:ri* ] > [ *-ja:i* ] > \**-je* のような変化は与那国方言に類例がなく、特定の形態素で生じた変化であること、\**Cje* という音節が（今のところ）接続形にしか再建できず<sup>45</sup>、純粋な音変化とは言いがたいこと、連用形と接続形が形態的に統合していることなどから、音韻変化ではなく形態変化に分類した。

### 5.2 ar 語幹動詞, a 語幹動詞の完了形の形態変化

与那国方言の完了形には *-aN* で終わるものと *-uN* で終わるものがあり、動詞によって決まっている（山田 2016: 284-285）。*-aN* は他動詞と意志的自動詞、*-uN* は非意志的自動詞に対応する。*-aN* は \**ar-*「ある」、*-uN* は \**wor-*「居る」に由来すると考えられる。

- (35) a. *sarjaN*「裂いた」、*njaN*「煮た」、*baN*「割った」、*baraN*「笑った」、*waN*「売った」、  
 ...  
 b. *saRuN*「咲いた」、*njuN*「煮えた」、*baruN*「割れた」、*baCuN*「忘れた」、*bjuN*「酔った」、  
 ...

ところが、一部の自動詞は非意志的と思われるのに完了形が *-aN* で終わる。

- (36) *aJaN*「上がった」、*araN*「当たった」、*amaN*「余った」、*samaN*「消えた」、*tasikaN*「助かった」、*hadimaN*「始まった」、*hiNnaN*「減った」、*maJaN*「曲がった」、*NgaN*「濡れた」、  
 ...

意味の上からは、これらの動詞の完了形が例外的に *-aN* となる理由は説明しがたい。ところが、

<sup>44</sup> *kuN*「来る」、*umuN*「思う」は過去接辞が付いた場合も C 型となる点が他の動詞と異なるが、*kuN*「来る」の過去形 *suraN* は \**kjota-* のような古形が推定されるから (cf. *su* < *kjou*「今日」、*suraN* は \**ki-ta-* (> \**raN*) のような連用形由来ではなく、\**kje+wor-i-ta-* のように存在動詞 \**wor-*「居る」を含む形式に由来すると考えられる。すなわち、*suraN* は連用形由来ではなく接続形由来のために C 型になると考える。同様に、*umuN*「思う」の過去形 *umuraN* も、\**omoi-ta-* ではなく \**omoje+wor-i-ta-* のように \**wor-* を含む形式に対応すると推定する。*umuN* の過去形には B 型のアクセントもあり、こちらは連用形由来の \**omoi-ta-* に対応すると考えれば、連用形は B 型、接続形は C 型という仮説の反例にはならない。

<sup>45</sup> 現在までに管見の限りで \**Cje* が再建される可能性があるのは、*iki* < [ *ikje* ] < \**ike*「池」と *Ndi* < [ *p̄iŋje* ] < \**pigai*「比川（地名）」である。*iki*「池」は \**igi* になっていないが、同時に口蓋化から期待される \**iri* にもなっていない。*ira* ~ *ika*「烏賊」の揺れや、口蓋化が規則的でないことから、[ *ikje* ] と口蓋化することで [ *-k-* ] > [ *-g-* ] を免れた後、[ *ikje* ] > [ *ike* ] > *iki* と脱口蓋化した可能性がある。*Ndi*「比川」は、比川の旧表記「鬚川」や八重山ヒナイとの関係からの推定である（宮良 1930 によれば、比川もかつてはヒナイと呼ばれたようだ）。しかし、「池」が *iki* なのは単に借用語のためかもしれず、「比川」も再建形に強い根拠はなく、あくまで可能性にとどまる。

これらの動詞は全て基本形が *-aruN* で終わる ar 語幹動詞という形態的な共通点がある。

- (37) *ajaruN* 「上がる」, *ataruN* 「当たる」, *amaruN* 「余る」, *samaruN* 「消える」, *tasikaruN* 「助かる」, *hadimaruN* 「始まる」, *hiNnaruN* 「減る」, *manjaruN* 「曲がる」, *NgaruN* 「濡れる」, ...

そのため、(36) は形式上は *-aN* で終わっているものの、本来は *-uN* で終わっていたものが、音変化によって *-aN* の形になった可能性が考えられる。音変化の過程の正確な再建は困難だが、*\*atarje-woN* > [*atai-on*] > [*ara-un*] > *araN* 「当たった」のように、*\*-a-uN* > *-aN* という変化が想定される。そうだとすれば、これらは非意志的自動詞の一部が例外的に *-aN* の完了形となっているわけではなく、音変化の結果、*-aN* 終わりになったものと考えられる。ar 語幹動詞と同様に、a 語幹動詞も (*kanuN* 「叶う」のような非意志的自動詞を含め) 完了形は全て *-aN* で終わる。

- (38) *asikaN* 「いじめた」(*asika-*), *araN* 「洗った」(*ara-*), *iraN* 「借りた」(*ira-*), *kaN* 「買った」(*ka-*), *kanaN* 「叶った」(*kana-*), *nijaN* 「願った」(*nija-*), *haN* 「食べた」(*ha-*), *haraN* 「払った」(*hara-*), *naraN* 「習った」(*nara-*), ...

[*-ai-on*] > [*-aun*] の変化は ar 語幹動詞および a 語幹動詞と完了接辞 *-uN* (< *\*wor-*) との間での条件変化と考える<sup>46</sup> が、[*-aun*] > *-aN* は (38) のように一般的な音韻変化の可能性もあり得る。

- (39) *dunaN* < [*ɔna'un*] < *\*jonaguni* 「与那国」(cf. 石垣方言 *junooN* 「与那国」)

[*-aun*] > *-aN* は、超重音節を回避するための変化と思われる<sup>47</sup>。

### 5.3 is 語幹動詞の認定

s 語幹動詞の基本形は原語幹から次のように作られる。

- (40) *cimas-uN* → *cimaN* 「終える」(cf. 接続形 *cimasi-ti* 「終えて」), *nas-uN* → *naN* 「生む」, *bagas-uN* → *bagaN* 「沸かす」, *urus-uN* → *uruN* 「落とす」(cf. 接続形 *urusi-ti* 「落として」), *kagus-uN* → *kaguN* 「隠す」, *mudus-uN* → *muN* 「戻す」

<sup>46</sup> [*-ai-on*] > [*-aun*] だけでなく、*-aN* が付いた場合に想定される *\*-a(r)i-aN* > [*-aan*] > *-aN* も形態変化と考えられる。*waN* 「売った；追った」, *mwaN* 「燃えた」などは *\*-u(r)i-aN* > [*-wjaN*] > *-waN* という *\*ui* の半母音化および有標な半母音連続 *\*wɔjV* の回避が働いた(久野 1988 によれば西表島祖納方言では [*ʔuwjan*]「泳いだ」, [*kwjan*]「漕いだ」, [*twjan*]「研いだ」, [*nwjan*]「脱いだ・縫った」と *wja* が現れる) とすれば音韻的な動機のある音変化のように思われるが、やはり形態変化と考える。なぜなら、名詞では *aja* < *\*ari-a* 「蟻」, *kubuja* < *\*kawabori-a* 「コウモリ」, *kurja* < *\*kotoi-a* 「牡牛」などとなり、動詞から予想されるような *\*a* 「蟻」, *\*kubwa* 「コウモリ」, *\*kurwa* 「牡牛」とはならないためである。一方で、*wajiruN* 「追いつ返す」(オイヤゲル) , *kwaNgiruN* 「掬い上げる」などでは *\*-ui-a-* > [*-wja-*] > *-wa-* という変化が生じている。変化の相対年代などを考慮する必要があると思われるが、半母音脱落(あるいは二重母音縮約)の条件については今後の課題である。

<sup>47</sup> 一方で、*uN* < *\*augi* 「団扇」, *kuN* < *\*kauzi* 「徴」では、仮に撥音化が先に生じていれば [*aun*] , [*kaun*] から *\*aN* , *\*kaN* が予想されるがそうになっていない。動詞でも、*kuN* < *\*kauN* 「買う」, *aruN* < *\*arauN* 「洗う」は *\*kaN* , *\*araN* になっていない。音変化の相対年代の違いか、形態素境界の有無の違い(*\*a-uN* > *\*aN* / *\*auN* > [*o:n*] > *uN* , *kau-N* > [*ko:n*] > *kuN*) が関わると思われる。*\*jonaguni* が *dunaN* となることから、音節境界も関係があるかもしれない (*\*jonaguni* > [*ɔna'un*] > *dunaN*)。

すなわち、語幹の /s/ が /u/ とともに脱落する (-suN → -N)。そのため語幹の母音が接辞 N の前に来るが、奇妙なことに -aN, -uN で終わる動詞ばかりで -iN で終わる動詞が全く観察されない。原語幹が is で終わる動詞があれば、-is-uN → <sup>†</sup>-iN となるはずだが、皆無なのはなぜだろうか。

as 語幹動詞, us 語幹動詞の完了形は次のようになる。

- (41) cimaN → cimasjaN 「終えた」, naN → nasjaN 「生んだ」, багаN → bagasjaN 「沸かした」, uruN → urusjaN 「落とした」, kaguN → kagusjaN 「隠した」, muduN → mudusjaN 「戻した」

一方で、完了形が -isjaN で終わる動詞がいくつかある。

- (42) isjaN 「やった」(基本形 iruN), kisjaN 「耕した」(基本形 kiruN), gjagisjaN 「邪魔した」(基本形 gjagiruN), …

このことから、(42) の動詞は is 語幹動詞と考えられるが、これらの動詞は基本形が iruN, kiruN, gjagiruN であり、あたかも is- ↔ ir- の語幹交替があるように見える。

表 4 is 語幹動詞の活用形

活用形	語例 「挟む」 原語幹 pas-	「食べる」 原語幹 ha-	「割る」 原語幹 bar-	「する」 原語幹 kir-	「耕す」 原語幹 kis- (?)
基本形	pa-N	h-uN	bar-uN	kir-uN	kir-uN
使役形	pa-miruN	ha-miruN	bara-miruN	ki-miruN	kisi-miruN
接続形	pasi-(ri)	hai-(ri)	bai-(ri)	ki-(ri)	kisi-(ri)
完了形	pasj-aN	h-aN	b-aN	kj-aN	kisj-aN
否定形	pa-nuN	ha-nuN	bara-nuN	kira-nuN	kira-nuN
受身・可能形	p-ariruN	h-ariruN	bar-ariruN	kir-ariruN	kir-ariruN
命令形	pa-i	ha-i	bar-i	kir-i	kir-i

as 語幹動詞, us 語幹動詞と比べると、基本形、否定形、受身・可能形、命令形などで「耕す」(is 語幹?) では r の添加が生じている。この r の添加は、母音語幹動詞の r 語幹動詞化との関連が考えられる。他の八重山語との比較から、与那国方言にもかつては母音語幹動詞 (i 語幹動詞) が存在した<sup>48</sup>と推定されるが、\*ugi- > ugir- 「起きる」と規則的に r 語幹動詞化した。

- (43) ugir-uN < \*ugi-N 「起きる」, nir-uN < \*ni-N 「煮る」, bir-uN < \*bi-N 「植える」, …

そのため、例えば基本形は \*ugiN > ugiruN 「起きる」と変化したと考えられるが、この変化に類推して、is 語幹動詞でも \*kiN (← kis-uN) > kiruN 「耕す」と変化したものとする。すなわち、is 語幹動詞が as 語幹動詞, us 語幹動詞と異なる振舞いを示すのは、i 語幹 > ir 語幹の変化の一部

<sup>48</sup> i 語幹動詞は共通語の一段動詞に対応するが、母音語幹動詞には kaw- :: ka- 「買う」, juw- :: du- 「結う」のように、共通語の w 語幹動詞に対応するものがあるから、「言う」(\*ip-), 「酔う」(\*wep-) なども i 語幹動詞だった可能性がある。「言う」に対応する語は ij-uN 「叱る」で j 語幹化している (cf. iju < \*iwo 「魚」) が、「酔う」は bir-uN で、一段動詞 \*bi-N から r 語幹化した可能性がある。

が is 語幹にも及んだためということになる。

ir 語幹動詞と is 語幹動詞は、他の語幹と比べて、使役形でも不規則な活用形を有する。ir 語幹動詞では、予想される使役形 \**iramiruN* ではなく *kimiruN* 「させる」のように *-imiruN* となる。is 語幹動詞では、予想される使役形 \**iramiruN* ではなく *kisimiruN* 「耕させる」のように *-isimiruN* となる。ir 語幹動詞の使役形は母音語幹の形式の残存だろう。母音語幹の使役形、否定形、受身・可能形は、古くは \**ki-miruN* 「させる」、\**ku-nuN* 「しない」、\**ki-rariruN* 「される／できる」だったと推定されるが、語幹の統一と類推により、未然形は完全に作り替えられ (\**ku-nuN* > *kira-nuN*)、受身・可能形は異分析を生じたが (\**ki-rariruN* > *kir-ariruN*)、使役形は変化を免れた。is 語幹動詞の *kisimiruN* 「耕させる」は、古くは \**kisa-sime-* だったと考えられるから、古形がそのまま保持されたわけではないが、*si* が脱落していないという点で、ir 語幹動詞への類推による変化を生じつつ、本来の形式を部分的に保持したものと考えられる。

#### 5.4 形容詞 \*-sa の内的再建

与那国方言の形容詞<sup>49</sup> は次のように *-aN* で終わる。

- (44) *asaN* 「浅い」、*acaN* 「厚い」、*iNsaN* 「重い」、*ubusaN* 「多い」、*kaN* 「深い」、*karaN* 「軽い」、*kwaN* 「固い」、*κ(w)aN* 「低い」、*gumaN* 「小さい」、*sagaN* 「少ない」、*sabaN* ~ *sabjaN* 「淡い」、*susaN* 「強い」、*taN* 「近い」、*tagaN* 「高い」、*dacaN* ~ *dacjaN* 「安い」、*daraN* 「柔らかい」、*twaN* 「遠い」、*naN* 「長い」、*hicaN* 「薄い」、*maisaN* 「大きい」、*maraN* 「短い」、…

形容詞が共時的に語幹と *aN* に分かれることは、次の2つの操作からわかる<sup>50</sup>。

- (45) a. 焦点化 *asa=du aru* 「浅くゾある」、*aca=du aru* 「厚くゾある」、*iNsa=du aru* 「重くゾある」、…  
b. 否定形 *asa minuN* 「浅くない」、*aca minuN* 「厚くない」、*iNsa minuN* 「重くない」、…

焦点化形では助詞 *du* によって *aru* (*aN* の結び形) が形容詞語幹から分離し、否定形では *aN* の代わりに *minuN* 「ない」が現れるから、*aN* は存在動詞「ある」に対応することがわかる。

(44) の形式の成立過程において、形容詞語幹に名詞化接辞 \**sa* が含まれているかが一つの争点になる。すなわち、*asaN* 「浅い」において、*asaN* < \**asa+aN* と、語幹に直接 *aN* が付いたとする説と、\**asa-sa+aN* のように、接辞 *-sa* が間にあったとする説がある (かりまた 2009)。

ところで、与那国方言では、接辞 *-tari* が、程度を表す形容詞のうち有標な意味の語幹に後続して動名詞<sup>51</sup> が作られる。

<sup>49</sup> 動詞 *aN* 「ある」との形態的な類似から動詞の下位分類とする立場もある (山田他 2013 など) が、*ai-bi* 「あるので」と *asa-bi* 「浅いので」、*ai=du kiru* 「ありゾする」と *asa=du aru* 「浅くゾある」のように *aN* とは形態・統語面で異なり、共時的に形容詞という1つの品詞と見なす方がよいと考える。

<sup>50</sup> 共通語の「浅い」と「浅くはある」、「浅くない」から「浅い」と「浅くある」が (共時的に) 同じ形態素とは言えないように、(45) の操作をもとに与那国方言の *asaN* 「浅い」が共時的に *asa+aN* からなると考えるべきではないかもしれない。むしろ、ここで強調しておきたいのは、(45) における形容詞の語幹が、共通語の「浅く」と同じく統語的に自立語として振舞う点である。

<sup>51</sup> 存在動詞 *buN* が後続して述語になるなど、統語的に動詞と類似するが、活用しない語を動名詞に分類する

- (46) asa-taTi 「とても浅く」, κ(w)a-taTi 「とても低く」, guma-taTi 「とても小さく」, ta-taTi 「とても近く」, dara-taTi 「とても柔らかく」, …

ところが、次の動名詞では、形容詞の語幹末母音が交替している。

- (47) karu-taTi 「とても軽く」 (cf. kara- 「軽い」), maru-taTi 「とても短く」 (cf. mara- 「短い」), hici-taTi 「とても薄く」 (cf. hica- 「薄い」), sabi-taTi 「とても淡く」 (cf. sab(j)a- 「淡い」), …

(47) の形容詞でのみ -taTi の前で母音が交替する動機はないから、本来の語幹の母音が現れたものと考えられる。一方で、karaN 「軽い」, maraN 「短い」, hicaN 「薄い」, sab(j)aN 「淡い」の否定形はそれぞれ kara minuN, mara minuN, hica minuN, sab(j)a minuN となる。もし karaN 「軽い」が \*sa のない \*karu+aN に由来するなら、karu-taTi から否定形は \*karu minuN となりそうだが、そうはなっていないため、kara minuN 「軽くない」の kara は \*karu-sa のように /a/ を含む形態素が融合していると考えられる。ただしこれだけでは、\*karu-sa 以外にも \*karu-wa 「軽くは」のように主題助詞 \*=wa が融合している可能性がある。ところが、否定形だけでなく、du による焦点形でも、kara=du aru 「軽くゾある」と du の前が kara になる。主題助詞 \*=wa と焦点助詞 =du が同じ要素に付くことは想定しがたく、kara=du 「軽くゾ」が \*karu-wa=du に由来すると考えることはできないため、\*karu-sa=du を再建する。焦点形 kara=du の kara が \*karu-sa に由来するのであれば、否定形の kara も \*karu-wa でなく \*karu-sa (あるいは \*karu-sa=wa) と分析した方が無理がなく、否定形に sa が含まれるのであれば、肯定形も \*karu-sa+aN > karaN と \*sa があつた形式に由来すると考えた方が自然だろう<sup>52</sup>。\*karusa > [karuha] > [karu'a] > kara の変化を経て、\*sa は語幹に取り込まれた。/s/ の脱落は、s 語幹動詞と一部の名詞にも見られることから、形容詞で \*sa が [ha] を経て /s/ が脱落するのは不自然ではない。nucaN 「あたたかい」は \*nuku+aN からは導けず、\*nuku-sa のように \*-sa を再建しなければならない (cf. ca < kusa 「草」)。また、ubusaN 「多い」、susaN 「強い」のように、基本的な形容詞の一部の語幹に sa が見られるものも、借用とは見なしがたく、語彙的に \*sa が保持されたものと考えたい。強意的な表現で、naN 「長い」が nasaN [na:saN] となる (cf. 山田他 2013: 303) のも、\*sa が借用によるものではないことを示唆している。

これとは別に、husaN 「欲しい」、kacimasaN 「うるさい」、mucikasaN 「難しい」など、シク活用当たる形容詞も -saN で終わる。\*sa が含まれるとすれば、次の変化を考える必要がある。

- (48) a. \*posi-sa > [φosi-sja] > [φosja] > [φosa] > [hosa] > husa  
 b. \*jasu-sa > [jasī-sa] > [jassī-sa] > [ɟʒatsī-ha] > [ɟʒatsī-a] > [datsa] > daca

シク活用の \*sa は -si の影響で [sja] と口蓋化し、語幹の -si と融合した。このとき、\*-si-sja > [ssja]

(与那国方言辞典編集委員会編 2021 も参照)。同様の振舞いを示す語は豊語にも見られ、副詞の下位分類とすべき可能性もある。

<sup>52</sup> 焦点形のみ karu-sa に由来し、karaN, kara minuN は \*sa を含まない \*karu-aN, karu-wa minuN に由来する可能性もあるが、焦点形に \*sa を含む形式を認めるのに、他では \*sa がいないと考える積極的理由もない。

と一旦は重子音化したかもしれないが、早い段階で *-sja* になったと考える<sup>53</sup>。そのため、\**ss* > [ʈ] の変化を受けず、また口蓋化していたために */-s-/* > [-h-] の変化も生じなかった。それに対し、*jasu-sa* 「安い」などではこれまでに推定した一連の変化 (*i* > *ï*, *sï* > *ssi* > *tsï*, *-s-* > *-h-* >  $\emptyset$ ) が全て生じた。

## 6. まとめと課題

与那国方言の音韻変化と形態変化のうち、以下について論じた。

音韻変化：*/s/* の破擦化の要因，語中の */k/* の有声化，順行口蓋化，鼻母音の再建

形態変化：接続形 \**-je* の再建，*ar* 語幹動詞と *a* 語幹動詞の完了形，*is* 語幹動詞の認定，形容詞の \**-sa* の有無

この中には、与那国方言だけでなく、他の方言にも類例が観察されるものがある。長い摩擦音と破擦音（破裂音）との対応は、[ʈs] ~ [ʈt] 以外にも [ʈf ~ ʈp] ~ [p] が南琉球に見られ（〔例〕竹富方言  $\phi\phi\text{əsəŋ} \sim \text{ppəsəŋ}$  「暗い」）、同様の音声学的動機があるかもしれない<sup>54</sup>。*/k/* の有声化も、本土方言を含め観察される。順行口蓋化は北琉球では一般的だが、南琉球にもある程度認められる。順行口蓋化の起こりやすさに地域差があるとすれば、その理由は何か。音声的あるいは音韻的な鼻母音とその融合も、本土方言を含め考えるべき問題である。接続形 \**-je* の再建は南琉球に共通し、与那国方言の *-uN* 完了形の形態変化と類似した問題が、波照間方言の進行形の変化にも見られる。*is* 語幹動詞は与那国方言固有の問題だが、動詞の活用クラスという点では、他方言でも同様の観点での調査が必要な可能性がある。形容詞の \**-sa* の有無も、八重山に広く存在する問題である。

本稿で論じられなかったものとして、与那国方言に顕著に見られる撥音化がある（〔例〕*nuN* 「蚤」、*diN* 「銭」、*muN* 「麦」、*miN* 「水」、*ciN* 「黍」、*Nsu* 「味噌」、*Nkadi* 「百足」、*Nmu* 「雲」、*Nni* 「舟」、*Ngı* 「髭」、*Ndai* 「左」、*NburuN* 「絞る」）。今回提示した音変化の相対年代や、変化に矛盾がないかの検討も必要である。これらについては稿を改めて論じたい。南琉球語諸方言を中心とした日琉諸語を概観しながら、与那国方言の歴史についてさらに解明していきたい。

<sup>53</sup> 首里方言でも、シク活用由来の *-sjaN* は *husjaN* 「欲しい」、*kasimasjaN* 「うるさい」、*muçikasjaN* 「難しい」と促音を伴わない。なお、石垣方言ではク活用とシク活用で違いはないようである。

<sup>54</sup> 与那国方言の */p/*（〔例〕*paŋai* 「鉄」、*paN* 「釣る〈クウス〉」）も、\**kuwa-* > [ʈu'a-] > [ʈpa-] > */pa-/* のようなプロセスを経たものと考えている。*kiruN* 「する」も、\**/se-/* > */he(r)-/* > */hhe(r)-/* > */ke(r)-/* > */kir-/* のように、*/s/* > */h/* の後、軽動詞として用いられた場合に語境界をはっきりさせるために重子音化が生じ、それが */k/* に硬化したのが本動詞にも及んだというのが現時点での仮説である。

## 参考文献

- 麻生玲子 (2020) 「琉球八重山語波照間方言の文法」博士論文, 東京外国語大学.
- 池間苗 (2003) 『与那国語辞典』与那国町: 池間苗.
- 井上史雄 (1968) 「東北方言の子音体系」『言語研究』52: 80-98.
- 内間早俊 (2013) 「南琉球方言のハ行 p 音」『言語科学論集』17: 23-34.
- 上野善道 (2010) 「琉球与那国方言のアクセント資料 (1)」『琉球の方言』34: 1-30.
- 上野善道 (2017) 「青森県津軽方言のアクセント資料」『ことばとくらし』29: 71-91.
- 上野善道 (2021) 「岩手県田野畑村方言のアクセント調査報告: 北奥方言アクセント祖体系との関連で」『国立国語研究所論集』20: 115-147.
- 大野真男 (1989) 「琉球波照間方言の音対応と音変化」『岩手大学教育学部研究年報』48(2): 1-17.
- 生塩睦子 (2009) 『新版 沖縄伊江島方言辞典』国頭郡伊江村: 伊江村教育委員会.
- 加治工真市 (1984) 「八重山方言概説」日野資純・飯豊毅一・佐藤亮一 (編) 『講座方言学 10 沖縄・奄美地方の方言』289-361. 東京: 国書刊行会.
- 加治工真市 (1996) 「竹富方言音韻の問題点」『音声学会会報』212: 16-25.
- 上村孝二 (1956) 「九州西南部方言における長母音について」『語文研究』4/5: 30-36.
- かりまたしげひさ (2009) 「波照間方言と与那国方言の形容詞語尾を言語接触からみる」『南島文化』31: 1-10.
- かりまたしげひさ (2013) 「与那国語におきた音韻変化」『琉球アジア社会文化研究』16: 60-81.
- 菊千代・高橋俊三 (2005) 『与論方言辞典』東京: 武蔵野書院.
- 木部暢子 (1990) 「鹿児島および東北方言の語中カ行タ行の子音について」『語文研究』70: 47-35.
- 久野真 (1988) 「西表島租納方言の音韻体系」『琉球の方言』13: 72-90.
- 国立国語研究所 (編) (1963) 『沖縄語辞典』東京: 大蔵省印刷局.
- Shimoji, Michinori (2014) A syntactic description of Yonaguni Ryukyuan: With a special focus on alignment and case-marking. *Sbigen* 10: 81-106.
- 上代語辞典編修委員会 (編) (1967) 『時代別国語大辞典 上代編』東京: 三省堂.
- 高橋俊三 (1992) 「琉球列島の言語 V) 与那国方言」亀井孝・河野六郎・千野栄一・三根谷徹・北村甫・南不二男・風間喜代三・西田龍雄・上村幸雄・松本克己・土田滋・上野善道 (編) 『言語学大辞典 第4巻』873-882. 東京: 三省堂.
- 富浜定吉 (2013) 『宮古伊良部方言辞典』那覇: 沖縄タイムス社.
- 服部四郎 (1979) 「日本祖語について・21」『月刊言語』8(11): 97-107.
- 早田輝洋 (2017) 『上代日本語の音韻』東京: 岩波書店.
- 原田走一郎 (2016) 「南琉球八重山黒島方言の文法」博士論文, 大阪大学.
- 日野資成 (2003) 「比較言語学入門 II」『人文学研究: 福岡女学院大学人文学研究所紀要』6: 197-224.
- 平山輝男・中本正智 (1964) 『琉球与那国方言の研究』東京: 東京堂.
- 平山輝男・大島一郎・中本正智 (1967) 『琉球先島方言の総合的研究』東京: 明治書院.
- 平山輝男 (編) (1988) 『南琉球の方言基礎語彙』東京: 桜楓社.
- 法政大学沖縄文化研究所 (1987) 『琉球の方言 12 (八重山・与那国島)』東京: 法政大学沖縄文化研究所.
- 宮城信勇 (2003) 『石垣方言辞典』那覇: 沖縄タイムス社.
- 宮良當莊 (1930) 『八重山語彙』東京: 東洋文庫.
- 山田真寛・ペラール, トマ・下地理則 (2013) 「ドゥナン (与那国) 語の簡易文法と自然談話資料」田窪行則 (編) 『琉球諸語の言語と文化 その記録と継承』291-324. 東京: くろしお出版.
- 山田真寛 (2016) 「ドゥナン (与那国) 語の動詞形態論」田窪行則・ホイットマン, ジョン・平子達也 (編) 『琉球諸語と古代日本語一日琉祖語の再建にむけて』259-289. 東京: くろしお出版.
- 与那国方言辞典編集委員会 (編) (2021) 『どうなんむぬい辞典 第2版』八重山郡与那国町: 与那国町教育委員会.

## Phonological and Morphological Changes in Yonaguni Dialect

NAKAZAWA Kohei

The University of Tokyo / Project Collaborator, NINJAL

### Abstract

The purpose of this study is to describe the phonological and morphological changes of the Yonaguni dialect, which is spoken in the westernmost part of Japan, and present the author's ideas in order to provide materials for future research. Regarding phonological changes, the following changes can be reconstructed in the Yonaguni dialect: /s/ gemination before high vowels, voicing of intervocalic /k/, progressive palatalization of consonants after /i/, and the change from /ni/ to [i̠]. As regards morphological changes, the following changes can be reconstructed: \*-i+ari > \*-je in the converb form, \*-ai-uN > -aN in the perfect form of the non-accusative verb, \*-is- > -ir- by analogy to the change from i-stem into ir-stem verb, and the reconstruction of suffix \*-sa- within the stem of adjectives.

**Keywords:** Yonaguni dialect, phonological change, morphological change, internal reconstruction, declension